

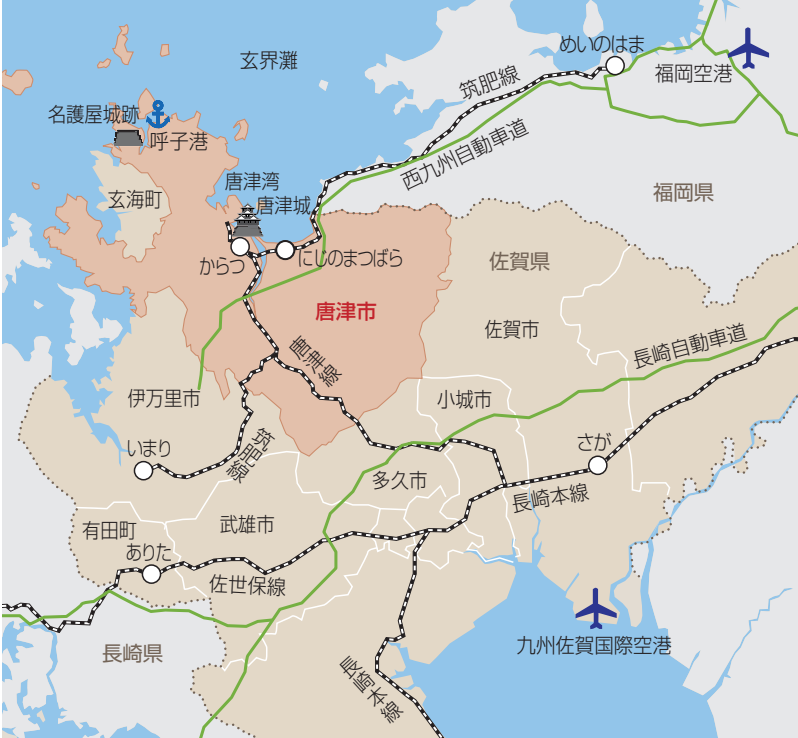
地域の底力

佐賀県唐津市

# 今、あらためて ふるさとを誇り 魅力を発信する 佐賀県唐津市

歴史的資産、祭り、伝統的工芸品。  
歳月を経て大切に受け継がれてきた  
まちの誇りを広く知らしめることで、  
唐津市はさらなる前進をはかる。

唐津市のまちなかに建つ「旧唐津銀行 辰野金吾記念館」。  
1997年まで佐賀銀行唐津支店として営業が行われた後、市に  
寄贈された。日本銀行本店本館ほか全国に残る洋風近代建築の  
設計を担った、地元出身の建築家辰野金吾が監修したもの。



## 唐津市にある多彩な資産を あらためて発信していく

佐賀県北西部に位置し、福岡県に隣接する唐津市は、県内では佐賀市に次いで二番目に多い約一二万二〇〇〇人の人口を有する。この地の歴史は古く、縄文時代の遺跡で日本最古の水稲耕作跡「菜畑遺跡」も発掘されている。また「魏志倭人伝」に記された弥生時代の末盧国ではないかともいわれる。

唐津市一带は、朝鮮半島に近い九州北西端という地域ゆえ、古から文化や人が渡ってくる日本の玄関口、そして交易の拠点でもあった。数多くの歴史舞台に登場したが、中でも文禄元年（一五九二）に始まった文禄・慶長の役では日本の政治・経済の中心となった。

「朝鮮半島への出兵基地として豊臣秀吉が名護屋城を築き、その命のもとに集結したおよそ一四〇の諸大名が陣屋を構えました。七年ほどの短い期間ではありましたが、唐津には約二〇万人が集まる大都市ができたんです」

そう語るのは、二〇一七年から唐津市長を務める峰達郎氏だ。名護屋城跡を中心に二三カ所の陣跡が国の特別史跡に指定され、徳川



縄文時代晩期から弥生時代中期にわたる水田跡が発掘された「菜畑遺跡」は、国指定史跡。市街地近くにあり、水田や竪穴式住居が復元されている。

家康、加藤清正、黒田長政など歴史好きの心をくすぐるそうそうたる武将たちが陣屋の主として名を連ねる。

加えて、豊臣秀吉によって当地に封ぜられていた寺沢広高が、慶長七年（一六〇二）から七年の歳月をかけて唐津城を築城。その後、昭和四十一年（一九六六）に、文化観光施設として五層五階の天守閣が建てられ、まちを見下ろしている。

「名護屋城、唐津城と、秀吉ゆかりの城が二つもある。大きな歴史的資産です。秀吉が遺したのは城だけではありません。兵の鼓舞と戦没者の供養のために当時おこなわれた綱引きが、今も『呼子大

綱引』という祭りとして受け継がれています」

唐津の祭りといえば、「唐津くんち」がもとも知られる存在だ。二〇一六年には全国一八府県三三件の祭礼行事とともに、「山・鉦・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録されたが、峰氏によれば、市内には唐津くんち以外に



「今後の観光対策強化のために、隣接する福岡県糸島市や九州の玄関口である福岡市とともに、九州北部地域の連携を進めていきたい」と唐津市長の峰達郎氏は話す。



唐津市北西部の鎮西町に残る名護屋城跡は、総面積約17ヘクタール。建設当時は大阪城に次ぐ規模を誇り、周辺約3キロメートル圏内に諸大名の陣屋が築かれた。

名護屋城の解体資材を利用して築城されたといわれる唐津城。現在の天守閣は1966年に天守台跡に建てられた。最上階の5階からは、唐津のまちや唐津湾の景色が一望できる。



もおよそ一七〇を数える祭りや文化伝承事業が受け継がれているという。

「二〇〇五年、〇六年におこなわれた一市六町二村の合併により、唐津市だけでこれだけ多くの文化伝統を受け継ぐことになりました。ただ、残念なことに、そのほとんどは広く知れ渡ってはいないんです」と峰氏は話す。

こうした歴史的、文化的資産に加えて、日本三大松原まつぼに数えられる「虹の松原」などの美しい眺め、呼子のイカや佐賀牛をはじめとする山海の美味、さらには唐津焼もある。

「『唐津に何がある?』と聞かれたときに、『何でもある』と言えただけのものが唐津にはそろっている。それが故に『唐津と言えは



唐津湾沿岸に幅約五〇メートル、長さ約四・五キロメートルにわたり一〇〇万本ほどのクロマツの林が広がる虹の松原は、一七世紀初頭に植林が行われた。玄海国定公園の一部。

これ」というものをアピールできていなかった。市長就任の際、僕は唐津の力を伸ばす約束をしましたが、そのひとつに発信力があります。唐津の魅力をうまく発信すれば、確実に観光につながる。一度来ていただければ、リピーターになってくださる。そう思っています」

一方で市民に対しては、「唐津プライド」というテーマを掲げた。「唐津は、食や文化面だけでなく、気候が温暖で災害が少ないなど、何げなく過ごしている日常が実はとても恵まれている。唐津人としてそれに気づき、誇りにし、ふるさとを世界にPRしていきたいましよう」というものです」



玄界灘の波が玄武岩を浸食してできた、唐津の景勝地のひとつ「七ツ釜」。名称は7つの洞窟が並ぶこと由来し、遊覧船でその洞窟を間近に見ることができる。

ただ、唐津市も他の地域と同じように人口減少が課題。合併時と比べて約一万人減少し、行政も頭を悩ませる。

「戸数は五万数千でほぼ横ばい。ということとは、単身世帯が増えていくんですね。半数近くが高齢者という地域もある。大きな商業施設や大企業が少ないため、若い世代は利便性や雇用を求めて市外に流出する傾向にあります」

その打開策として市民が集える環境をつくりたいと峰氏が力を注ぐのが、ファミリー層が楽しめる娯楽施設の建設だ。人気を博する公営競技場の敷地を活用し、子どもたちが遊べるアトラクションを導入する計画が進められている。

また、これまで取り組みが遅れていた企業誘致に関しては、化粧品分野での産学官連携組織として誕生した「ジャパン・コスメティックスセンター(JCC)」に期待がかかる。

「二〇一三年にフランス・コスメティックバレーと協力連携協定を締結し、JCCを設立しました。現在はそのフランスをはじめタイ、台湾、イタリアなどのコスメティック関連企業と連携。二〇〇社以上にご参加いただき、いくつかの企業はすでに唐津で操業しています。こうした動きが地域の雇用や消費につながればいい。少しずつですが、手ごたえを感じはじめています」



元日以外の毎日午前中に開催される呼子の朝市。特産品のイカをはじめとする新鮮な魚介類や干物、野菜などを売る店が約200メートルにわたり並び、観光客でにぎわう。



唐津曳山取締会総取締の大塚康泰氏は「唐津はくちがあるから人のつながりがきちんと保たれている」と話す。後ろは大塚氏が住む京町の曳山「珠取獅子」。全14台の曳山は、祭りの時期以外でも唐津神社近くの「曳山展示場」で見学できる。

## 神事である祭りを守り 子どもたちに継いでいく

唐津市の誇り。その代表格が、唐津くちだ。文化の日をはさむ十一月二〜四日の三日間にわたり開催され、約五〇万人の観光客が国内外から訪れる。

とりまとめ役である唐津曳山取締会の八代目総取締大塚康泰氏によれば、「ヤマ」と呼ばれる曳山は現在一四台あり、一八一九年から七六年にかけて作られたものだという。曳山が巡行する一四の町の区分けは、江戸時代からほとんど変わっていない。

「唐津くちは、唐津神社の秋季例大祭。唐津大明神である住吉三神は海から来られた神様です。一四カ町を清めるために曳山を曳



くんです。くちは単なるフェスティバルでも遊びでもなく、神事なんです。この認識を守り続けることができれば、唐津くちが途絶えることはないと思っ

「全国的に見れば、伝統行事を未来へと受け継ぐ人材の確保が課題となっていて、地域が少なくないが、唐津では後継者に事欠かない」と大塚氏は話す。

たとえば幼稚園、保育園では、曳山の名を組み込んだ「手遊び歌」の替え歌が歌われている。小学生になると、各町内でおこなわれる笛の練習に参加する。

「そういう流れを経てヤマに興味を持ち、自然と唐津くちに参加したいと思う子どもたちが増えてくるんです。私たちは社会教育の一環を担っている、という意識

も強く持っています。

子どもたちが大きくなって祭りに参加すれば、地区のつき合いや人間関係を学ぶことにもつながりますから」

「本筋は変えてはいけません。でも、将来の唐津くちのためにやるべきことはやりますよ。近年、曳山の修理のための材料が不足しています。そこで、県と市から山を借りて二〇一八年からアカガシの植林を始めました。これを利用できるのは早くて一〇〇年先と気が遠くなるような話ですが、材料の希少価値が高まるなか、今やっておかなければならないんです」

## 多くを語らずとも魅せる 唐津焼は静かな観光大使

祭り同様、唐津の名を冠した誇れるものに、唐津焼がある。その歴史は四二〇年以上前、安土桃山



唐津市最大の祭りである唐津くち。「エンヤ、エンヤ、ヨイサ、ヨイサ」のかけ声のなか、14台の曳山が旧城下町をまわる。右手奥の鳥居は、唐津神社。

時代にまでさかのぼると話するのは、中里太郎右衛門陶房の十四代中里太郎右衛門氏だ。代々唐津藩の御用焼き物師を務めていた中里家には、初代が一五九六年に焼き物を手がけたという記録があるそうだ。

「唐津焼の特徴は、素材で温かいこと。貫入というひび割れができて、使ううちにどんどん色が変化していくのも魅力です。何十年どころか何百年の歳月を経ても、唐津焼は変化していくんです」

興味深いのは、明治以降減少していた窯元数が、今では約七〇軒を数えるほどに息を吹き返してきたこと。なかには、海外出身の陶芸家もいるとか。

中里太郎右衛門陶房の十四代中里太郎右衛門氏は、唐津出身の篠笛奏者佐藤和哉氏や地元料理人とも手を組み、唐津と日本の伝統文化の発信に努めているという。



「一般的に伝統産業の担い手が減りつつあると聞きますが、唐津焼に関しては若手を中心に窯元が増えていますから、皆さん驚かれないんです。唐津焼はきらびやかさがなく、渋い良さがある。そうした唐津焼特有の趣が多く、陶芸家をひきつけているような気がします」

一方で、世界的に知られる有田焼とは異なり、唐津焼の認知度は国内外ともにまだまだ低いと中里氏は語る。

「ですから唐津焼を理解してもらうために、さらには唐津焼を通して日本の伝統文化を世界に知ってもらうためにどうするべきかと日々考えています」

その課題に対して中里氏は海外のイベントに積極的に参加し、唐津の名前を広めるいわば観光大使

唐津焼は上の器のように作られた趣をたたくているのが特徴だが、中里氏の作品には鮮やかなブルーに彩られた器も見られる。



唐津駅前観光客を迎えるのは、唐津くんちの曳山のひとつ「赤獅子」をかたどった像。高さ約3.5メートル、重さ約2.1トンと、唐津焼の像としては最大のものだ。

として活動している。フランス、イタリア、イギリス、タイ。いずれの地でも、披露した作品は高い評価を受けたという。

「器は言葉を介さなくても、見て感じてわかってもらえる。タイで『いい焼き物とは、どういうものですか?』と質問を受けた際、『それは、人の心を打つものです』と答えたところ、どよめきが起こりました。唐津焼を通じて日本人の心を知ってもらえたのかもしれないが、そういう反応は逆に新鮮ですね」

地元では、ほかの窯元と連携してイベントを開催。そのひとつ、五月の連休中にまちなかの商店街

を利用して催される「唐津やきもん祭り」は、八年の歳月を経て毎年三万人の人が訪れるほど人気を博すようになった。

加えて、唐津焼の陶片を模した唐津焼陶片せんべいを開発するなど、中里氏は「これまでの伝統にないことに挑戦したい。いろいろなつながりで、世界に唐津焼を広めたい」と話す。

### 「去華就実」を守りつつ唐津の未来を思う

唐津は多くの功績ある先人たちが生まれ育った地でもある。後に触れる建築家の辰野金吾のほかに

も、早稲田大学学長や早稲田実業学校の校長を務めた経済学者の天野為之、丸の内オアイス街の基礎を築いた建築家の曾禰達蔵、九州ほか全国の炭鉱開発に力を注いだ麻生政包ら、明治維新後、日本の近代化に影響を及ぼした人々を数多く輩出した。そう語るのは、宮島醤油株式会社代表取締役社長で唐津商工会議所会頭でもある宮島清一氏だ。

「その理由には、英語教育を行う洋学校『耐恒寮』が一八七一年に創設された際、後に日本銀行総裁や総理大臣などを歴任した高橋是清が英語教官として赴任し、すばらしい教育をおこなったことがあげられます」

辰野金吾もまた、この耐恒寮を経て海の向こうへ渡っている。

「それにも増して強調したいのは、江戸時代を通じて唐津の少年教育が非常にすぐれていたということ。耐恒寮の生徒たちは英語こそ素人でしたが、漢文の知識においてはすぐれていた。高橋是清は学生たちに負けないよう、この地で必死に漢文の勉強をしていました」

宮島醤油代表取締役社長の宮島清一氏。1882年創業の宮島醤油は現在、唐津市内事業所の約400名を含め全国で700名近い従業員を抱える。



宮島氏によれば、江戸時代の唐津は漢文をはじめ民間教育が盛んだったとか。そこには、二七〇年間に大名家が六代かわった歴史が影響しているという。

「この地にゆかりの薄い殿様に對して忠誠心が弱かったこともあり、代々ある大庄屋が中間管理職として大きな役割を果たしてまいりました。庄屋は業績を上げるため教育や産業の振興を手がけ、競い合って民間塾をつくりました」

また、古くから唐津は、大陸、朝鮮半島に向かって開かれ、当地を詠んだ歌が万葉集に何十首も見られるほど。その唐津に住む人の氣質を、宮島氏はこう語る。

「郷土愛が非常に強いですね。よそをうらやましがるとは、唐津

が一番と思っている人たちが多いと思います」

宮島氏が会頭を務める商工会議所の考えも、同様だ。

「唐津の良さを認識し、それを生かしていく。歴史と文化のまちづくりをしつかりやろうというのが、唐津の経済界の基本的なスタンスです。住みよい、上品なまちであるということが一番大事で、それを崩す必要はない。観光、とりわけインバウンドに関しては、巨大な免税店などはありませんが、焼き物や景色、食事などを楽しんでいただきたい。そういう路線でいいと思います」

宮島醤油本社の応接室には、唐津藩主の直系で、海軍中将や宮中顧問官を務めた小笠原長生が、同社創業者七世宮島傳兵衛に送った書「去華就実」が社是として掲げられていた。この言葉は、「表面的なこと、華やかなことを捨て、実質あることに専念せよ」という意味だが、質実な歴史的資産を守ってきた唐津のまちな、侘びた魅力をつたえる唐津焼をほうふつとさせ印象深かった。

## 唐津出身の建築家 辰野金吾の名を 広めるために

歴史的資産としては、一九二一年に竣工した「旧唐津銀行」が新たに脚光を浴びている。県の重要文化財に指定された建物は、前述した辰野金吾が監修し、その弟子の田中実が設計を手がけた。赤いれんがと白い御影石の組み合わせや屋根の上に王冠のように小塔やドームを載せる、「辰野式」と呼ばれる独自の様式が見られる。

江戸時代末期に唐津の下級武士の子として生まれた辰野金吾は、イギリスに留学の後、日本の近代建築の先駆的存在として数多くの

洋風建築を手がけた。日本銀行本店本館、東京駅丸の内本屋、大阪市中央公会堂、奈良ホテルなどが今も残るが、辰野の地元ではその功績をたたえる意識はこれまで薄かったと話すのは、「唐津赤レンガの会」会長の田中勝氏だ。

佐賀銀行唐津支店としての役割を終え、建物は二〇一一年から一般公開されていたが、文化財としての旧唐津銀行をより力強く発信するために、「辰野金吾」の名をつきたい。その願いをかなえるのに、辰野金吾没後一〇〇年となる二〇一九年を絶好の機会ととらえ、同会では三一七六名の署名を集め、建物を所有する唐津市に働きかけた。尽力は実り、辰野金吾の命日

唐津赤レンガの会会長の田中勝氏は、日本国内だけでなくフランスにまで赴いて唐津くんちの囃子のパフォーマンスを披露するなど、長年にわたり唐津の観光面での魅力発信に力を注いできた。



にあたる三月二十五日、旧唐津銀行は別称を「辰野金吾記念館」とする承認がおりた。

その喜びをかみしめつつ、唐津赤レンガの会の発足のきつかけとなった一二年前のできごとを田中氏は振り返る。

「東京で観光バスに乗った際、東京駅は辰野金吾設計という説明があったものの、残念ながら彼の出身地などにはなにも触れられなかったんです。私からすれば、辰野が佐賀県唐津市の出身であることぐらいは言っておしかなかったのですが……。そういう思いから郷土の誇りである辰野金吾をもっと発



「旧唐津銀行 辰野金吾記念館」には、窓口のカウンターほか明治時代から受け継がれてきた空間が残る。一角には、唐津焼でできた辰野金吾の胸像も展示されている。

信しなければとスタートしたが、唐津赤レンガの会の前身です」

辰野金吾記念館の別称が付されたことにより、まちの注目度は高まりつつあると田中氏は話す。辰野金吾の命日には慰霊祭が行われ、

明治時代、炭鉱技術者から村島炭鉱の炭鉱主となった高取伊好の邸宅もまた、唐津市の歴史的資産のひとつ。約二三〇〇坪の敷地に建つ屋敷には、能舞台も備えられている。



れ、今後は記念館での展示の充実がはかれるが、田中氏にはさらなる思いがある。

「福岡市の赤煉瓦文化館（旧日本生命保険株式会社九州支店）、北九州市の西日本工業倶楽部会館（旧松本家住宅）、大分銀行赤レンガ館（旧二十三銀行本店）、武雄温泉楼門など、九州に残る辰野金吾の作品をまわる記念ツアーができればと思っています。まずは九州からはじめ、東京駅、日本銀行、奈良ホテルなど全国へと広げていきたいですね」

### 守りつつ攻める 唐津流が未来に花開く

地に根付く良きものは守りながら、唐津は少しずつ進化している。二〇一八年には初めて、海外のクルーズ船が唐津に寄港。一九年には地元の老舗ホテルがよりグレイドアップした新館をオープンさせ、駅前誕生する商業施設には長期滞在客、いわゆるバックパッカー向けの簡易宿泊所が設けられるなど、観光客の受け入れ態勢が着々と整備されている。



絶景のビューポイントとして知られる標高約284メートルの鏡山から眺めた虹の松原と唐津湾。晴れた日には、海の向こうに壱岐の島が見えることもあるという。

また、唐津をはじめとする佐賀県を舞台としたアニメーション作品「ユーリ!!! on ICE」『ゾンドラゴ』が話題となり、物語に描かれた場所を数多くのファンが訪れるようになった。これまでと異なる層が唐津へと旅すれば、まちが活性化するだけではなく、市の埋もれている資産に光が当たれる可能性もある。

歴史や古き良き伝統を受け継いで守り、そしてまちの誇りを発信する革新的な攻め。未来に向けて攻守が力強く巧みに働くことで、唐津の魅力はより輝きを増すことだろう。